

協会だより

目次

ご挨拶	……………	p.2
協会沿革・組織図	……………	p.3
当協会における高次脳機能障害 活動の取り組みを振り返って	……………	p.4-5
新人研修報告	……………	p.6-7
編集後記	……………	p.8

発行日 平成 21 年 4 月 6 日

編集・発行 群馬県医療ソーシャルワーカー協会
〒377-0541
群馬県吾妻郡中之条町大字上沢郷 2136
(沢郷温泉病院 医療福祉相談室内)
TEL 0279-66-2121
FAX 0279-66-2900
URL <http://www.asahi-net.or.jp/~vsi9k-nkk/>

協力 群馬県立女子大学 デザインゼミ

ご挨拶

群馬県医療ソーシャルワーカー協会 会長 宇野 浩文

このたび、当協会の対外的な広報誌を創刊するにあたり、今までご理解、ご協力をいただきました各関係機関の皆様には、本誌面をお借りして、改めて感謝申し上げます。



当協会は、主に、県内の保健医療機関等に所属するソーシャルワーカーで構成された、任意の職能団体です。昭和37年の設立以来、県内のソーシャルワーカーが自主的に集まり活動を続けてきました。平成20年7月現在、会員数は200名を超え、県内79ヶ所の保健医療機関に所属しています。私たちソーシャルワーカーは、保健医療分野に於いて、社会福祉の立場から、患者やその家族に対してソーシャルワークを実践する専門職を言います。わかりやすく言えば、罹患をきっかけに起こる、生活上の様々な問題（生活課題）を、身体的、心理的、社会的側面から援助し、解決への支援をしていく専門職ということですが、近年、原則的にソーシャルワーカー＝社会福祉士（国家資格）という認識も根付いてきましたが、まだまだ社会的認知度は十分なものとは言えません。

しかし、現在、社会構造が複雑化する中で、相談援助を求めるクライアントが増加し、ソーシャルワーカーに対する期待が高まっていることは実感しています。事実、ここ数年、各関係機関からの協力要請も増加傾向にあり、微力ではありますが、ご協力させていただいています。それは単に、保健医療分野に留まらず、医療安全や難病対策、緩和医療や地域リハビリはもとより、犯罪被害者支援、児童虐待

防止、高次脳機能サポート、多文化共生、災害支援等、その活動の場は確実に広がりつつあります。

私たちが対象とするクライアントは、基本的には各自が所属する施設の利用者になりますが、生活課題の複雑化に伴い、その施設内だけで問題解決できない状況が多く見られるようになってきています。この困難を乗り越えるためには、施設が所在する地域の各関係機関と協力して取り組んでいかなければなりません。また、人と環境（地域社会等）の調整・調和を図ることを目的とするソーシャルワークの基本から、地域社会に目を向けていくことは自然な流れと言えます。つまり、今後は、「ソーシャルワーカー in 保健医療機関」から「ソーシャルワーカー in 地域社会」へとシフトしていくのは当然のことと考えています。

他の専門職同様に、人権擁護の立場で、そして、ソーシャルワークという技術を駆使し、地域社会のためにお役に立てる専門職でありたいと思っています。



今まで、会員向けの広報誌は「協会だより」として存在していましたが、こうして広く、私たちの活動をご紹介できる広報誌はありませんでした。各保健医療機関、各種職能団体、各行政機関、各関係団体の皆様、これを機会に、改めて、ソーシャルワーカー、及び、当協会へのご理解をいただき、引き続きご支援を賜りますよう、協会を代表し、心よりお願い申し上げます。

群馬県医療ソーシャルワーカー協会

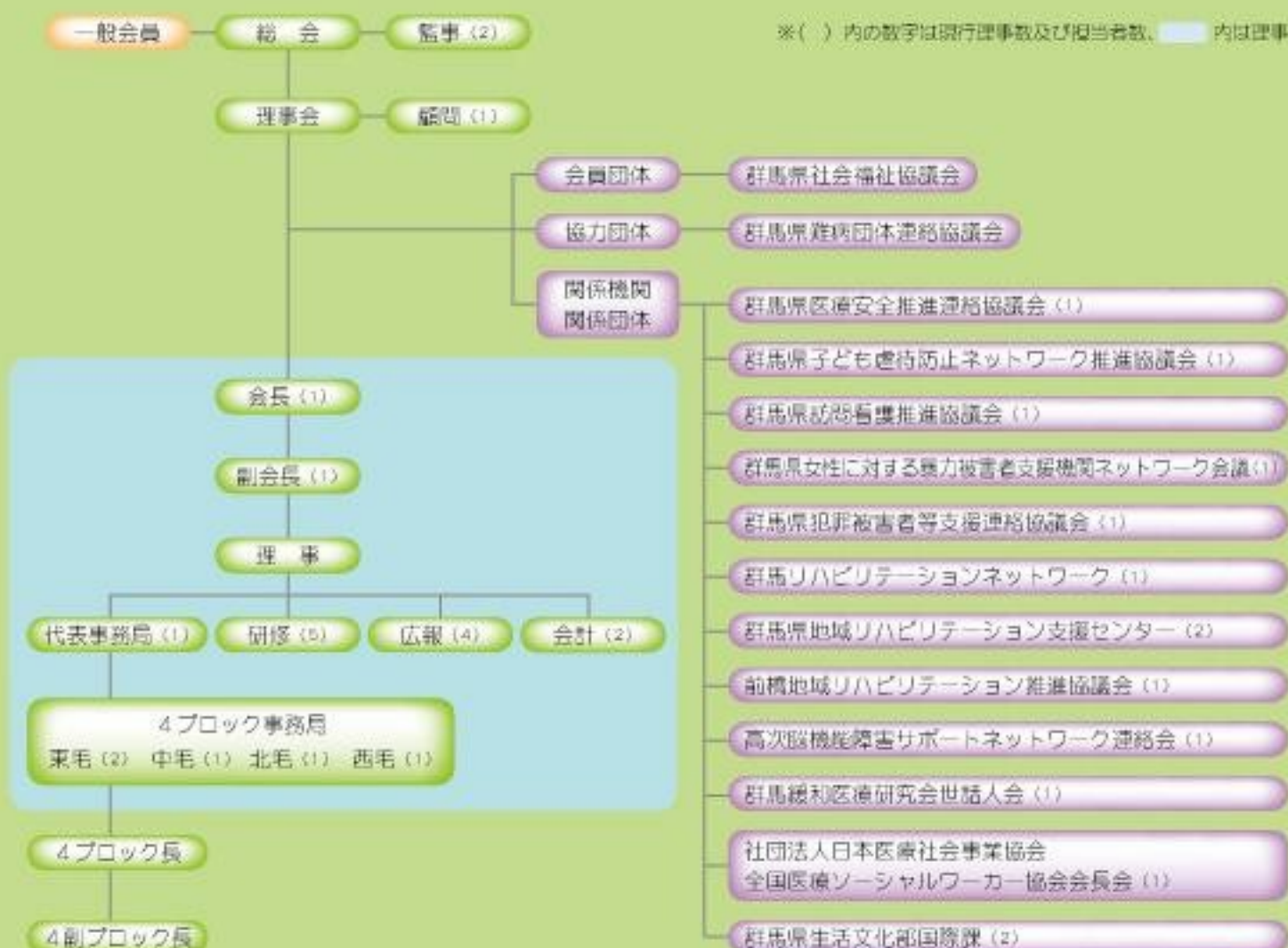
沿革

- 1962年（昭和37年）8月14日 「群馬県医療社会事業協会」として設立 会員数 27名
- 2001年（平成13年）5月より 「群馬県医療ソーシャルワーカー協会」へ名称変更
- 2008年（平成20年）7月31日現在 会員数 204名

事業内容

- 研修活動（新人研修、全体研修、生涯学習、グループ活動サポート事業、事例発表、各ブロック毎の自主研修等）
- 関係機関・関係団体との連携等

群馬県医療ソーシャルワーカー協会組織図（平成20年度版）



当協会における高次脳機能障害活動の

群馬県医療ソーシャルワーカー協会では、高次脳機能障害について以下の活動を行ってまいりました。群馬県こころの健康センターより高次脳機能障害普及啓発資料の作成依頼を受け、県内のさまざまな機関の代表が集まり発行に向けて意見交換をいたしました。当協会からは老年病附属病院・MSW 狩野寛子氏と美原記念病院・MSW 加藤充子氏とともに、年度末行われた作業部会に参加し、社会資源ハンドブック完成に至りました。関係機関に配布されましたので、ご一読いただければ幸いです。このハンドブックはこころの健康センターのホームページから閲覧可能です。

また県協会の会員向けに自主的な研修活動として4回からなる研修会を平成19年度に実施いたしました。会員15名が参加し、以下のテーマにて知識を深めました。

『高次脳機能障害って何？ 他職種はどう関わっているの？』

『家族の人と話してみよう！ 実際の生活で障害されることって何？』

講師：NPO 法人 ノーサイド会長 立上葉子氏

『事例検討2題』

講師：NPO 法人 ノーサイド会長 立上葉子氏

『まとめ』



サンピエール病院 精神科デイケア 中島 基彰

立上会長には当事者家族の立場から事例を提出していただき、実践的な内容で考察できたと思います。実際の事例を通して群馬県にある施設や社会資源を具体的に考えると・・・高次脳機能障害のかたが利用できる資源はほとんどなく、言葉にならない現状がそこにはありました。ソーシャルワーカーとして無力感を感じたのは私だけではなかったように思います。



これまでの活動を通じての意見ですが、高次脳機能障害を持つ方の支援体制・社会資源が県内に少ないことを痛感いたします。私は精神科デイケアを担当していますが、介護保険適用前の若年の方の利用施設の乏しさ、数少ない利用可能施設である精神科デイケアへの依頼の多さを感じます。しかし統合失調症や躁うつ病などと症状が異なるため、高次脳機能障害を有する方へのリハビリとして、十分な対応ができないことが現状です。例えば精神科デイケアには言語聴覚士の有資格者がいないのもそのひとつと考えます。各地区（中毛・西毛・東毛・北毛に一箇所ずつ）にそのような方が利用できる専門のリハビリ施設の設置が急務ではないかと感じています。

車社会の群馬県。交通事故も多く、一般的な脳障害だけでなく、脳機能へ障害を受ける可能性は十分に高いと思います。しかし支援体制は不十分であるのが現状です。群馬県として、今回のハンドブックが第一歩になったのではないかと思います。その後も各職能団体が集まる会議も行われました。会議という形式だけの夢物語でない、実用できる“もの”が構築される、そんな日が近い未来に創造・実現できるよう、協力できれば幸いです。





新人研修報告

参加対象者を経験年数2年未満とし、平成20年度はより多くの新人が研修を受けられるよう定員を作らず参加者を募りました。グループにて講義・ロールプレイ・ディスカッションを行っています。講義ごとにレポートを提出し、講師からコメントを頂く形式をとっています。

以下を実施目標としています。

目標 1 参加者の協調性と仲間を作る。

目標 2 積極的な発言をしやすい環境作りに努め、自己の意見・考えを述べる。

目標 3 他参加者の意見を聞くことで、自己覚知につなげる。

目標 4 レポート（報告書等）を作成することで、自己の振り返りを行う。

平成20年度は6月～2月まで全8回で行われます。『保健医療ソーシャルワーク原論』（相川書房）をベースに、ソーシャルワークの価値や倫理に重点を置いています。

研修を重ねるごとに緊張も徐々に和らぎ、後半は活発なディスカッションが行われています。



研修の様子



グループディスカッション中



真剣に聞き入ります



グループ発表



イラストを使ってわかりやすく



たくさんの意見が出ました

緊張しながら発表中



編集後記

会員の皆様のご協力で、今回初めて協会会員以外の方に向けての群馬県医療ソーシャルワーカー協会の協会だよりを発行することが出来ました。お忙しい中、原稿依頼させていただきありがとうございました。皆様に、群馬県の医療ソーシャルワーカーの活動について、ご報告できたこと嬉しく思います。

私自身、至らぬ点もありご迷惑をお掛けしたと思いますが、今後より良い協会だよりが発行できるよう協力していきたいと思っています。

中央群馬脳神経外科病院 諸星 智美

この度は皆様のご尽力のおかげで群馬県医療ソーシャルワーカー協会協会だよりを発刊することができました。この場を借り御礼申し上げます。関係機関のみなさまに協会のことを知っていただくきっかけとなれば幸いです。

高崎中央病院 清水 恭子

この度、協会外へ向け、初めて協会だよりを作成しました。

医療ソーシャルワーカーは年々増え続けていますが、業務が確立されていなかったり、立場が不明確等まだまだ発展途上の職種です。

この広報誌を通して医療ソーシャルワーカーを少しでも皆さまにご理解いただき、また群馬県医療ソーシャルワーカー協会を知っていただけたら幸いと考えております。

独立行政法人 国立病院機構 沼田病院 小淵 匡

今回、協会だよりを発行し、皆様にお届けすることができました。私たちの業務が多くの方に知っていただけるよう、広報活動を通じてご理解頂ければと思っております。

最後に「協会だより」発行にあたり、群馬県立女子大学のデザインゼミ 高橋綾准教授はじめ皆様のご協力に対し厚く御礼申し上げます。

角田病院 小林 一幸